長崎国際大学教育基盤センター紀要　第４巻　2021年３月　１頁～17頁

原著論文

遠隔教育の実施と大学での教育に関する一考察
――建学の精神を伝える授業のオンラインでの実施をもとに――

藤原俊幸[1)]，陳　慶光[2)]，矢野俊幸[3)]，
松永雅弘[4)]，松本欣也[5)]，東出　朋[2)]，
高橋憲司[2)]，幸山智子[2)]，中村尚生[2)]，
ヴィラーグ　ヴィクトル[2)]，小田和人[6)]，藤井俊輔[6)]，
田中啓太郎[7)]，藤木　司[7)]，久保隆司[8)]，
池山剛彦[9)]，飯沼慶介[10)]，劉　卿美[11)]，
橋本優花里[12)]，橋本健夫[2)]

([1)]教育基盤センター、[2)]人間社会学部、[3)]事務局、[4)]大学評価・IR 室、[5)]教務課、[6)]健康管理学部、[7)]薬学部、[8)]図書課、[9)]総務課、[10)]学生課、[11)]長崎大学、[12)]長崎県立大学)

Consideration about remote classes and university education
—Based on the implementation of first year education which teach the spirit of our university's foundation—

Toshiyuki FUJIWARA[1)], Keikou CHIN[2)], Toshiyuki YANO[3)],
Masahiro MATSUNAGA[4)], Kinya MATSUMOTO[5)], Tomo HIGASHIDE[2)],
Kennji TAKAHASHI[2)], Tomoko KOUYAMA[2)], Naoki NAKAMURA[2)],
Virag VIKTOR[2)], Kazuto ODA[6)], Shunsuke FUJII[6)],
Keitaro TANAKA[7)], Tsukasa FUJIKI[7)], Ryuji KUBO[8)],
Takehiko IKEYAMA[9)], Keisuke IINUMA[10)], Kyonmi YOU[11)],
Yukari HASHIMOTO[12)] and Tateo HASHIMOTO[2)]

([1)]The Center for Academic Successes, [2)]Faculty of Human and Social Studies, [3)]vice-secretary general, [4)]Evaluation and IR office, [5)]student affairs office, [6)]Faculty of Health Management, [7)]Faculty of Pharmaceutical Science, [8)]library office, [9)]general affairs section, [10)]student affairs office, [11)]Nagasaki university, [12)]University of Nagasaki)

Abstract

Due to the spread of COVID-19 started at the end of 2019, many universities have decided to implement remote teaching in the new semester of the 2020 academic year in Japan.　Our university has also agreed to adopt remote teaching, and one of our first-year education classes, Introduction to Hospitality, was offered online.

We conducted another survey to explore the future of remote classes, which will significantly impact the future of university education.　The results revealed the following:

1）There was a difference in the students' IT environment.
2）The students' devices to attend remote class were divided into personal computers, tablets, and smartphones.
3）Opinions on the use of remote classes were positive, but there were also requests for improvement.
4）The results of the comparison between students using smartphones only and those using computers and tablets showed differences in the clarity of the screen, the progress of the class, and the understanding of the class.　The score was significantly lower than those of the smartphone-only use.

5）Some students mentioned the advantages of remote classes, whereas others were concerned about acquiring friends and mutual enlightenment.
Based on these result, we discussed the notion of ideal remote classes and what might represent the ideal university education in the future.

Key words
First year experience program, Prevention COVID-19 from spread, On-Line education

要　旨
2019年末に端を発した新型コロナ感染症（COVID-19）の拡大によって、多くの大学は2020年度の新学期から遠隔教育の実施に踏み切った。本学においても遠隔教育の採用が決定され、ホスピタリティ概論も IT 機器を活用したオンラインでの実施となった。この中で大学教育の将来像に大きな影響を与えると考えられるオンライン授業の在り方を探る基礎調査を実施した。その結果、次のことが明らかになった。1）受講生の IT 環境の整備には、差がみられること、2）受講生の使用する機器は、パソコン、タブレット、スマートフォンに分かれること、3）オンライン授業に関しては、肯定する意見がある一方、改善を要望する意見も見られること、4）スマートフォンのみでの受講者とパソコンおよびタブレットでの受講者を比較分析した結果、画面の明瞭度や授業の進行、及び授業の理解などにおいて両者に差がみられ、スマートフォンのみでの受講者の方が有意に低い結果であったこと、5）遠隔授業に関する要望等の中には、遠隔教育の利点を述べている受講生の他に、授業以外の大学が持つ機能、つまり、友人獲得や相互啓発に関する不安も多くみられたこと。
この結果等を踏まえ、オンライン授業のあり方、及び、将来社会における大学教育のあり方に関する提案を行った。

キーワード
新型コロナ感染の防止、初年次教育、オンライン授業

1．はじめに

2019年末に発症が確認された新型コロナ感染症（COVID-19（Coronavirus Disease 2019））は、年明けとともに全世界に広がり、市民生活に多くの影響を及ぼした。感染拡大によって、4月に新学期を迎える学校教育においては、卒業や入学という節目の行事の実施が不可能になり、さらに、その後の感染状況によって、新学期の授業実施が大きな影響を受けるというかつてない経験をすることになった。

特に深刻であったのは、国内国外からの学生が集う大学であった。留学生への対応や日本各地からの学生に対して、入学前の住居等の支援や授業開始にあたっての指導が十分にできないまま新学期の開始を迎えることになった。本学においても、学生は大学との連絡が十分に行えないまま一方的に大学の指示が来るという状況に置かれ、本人はもちろんのこと保護者からの問い合わせも少なくなかった。特に、1年生にとっては自分が入学した大学のイメージすら持てない中で新学期が始まった。

当時の大学の行動を後押ししたのは、2020年4月6日の文科省の通知であった[1)]。大学の教育を規定する学校教育法及び大学設置基準は、面接での教育（対面教育）を原則として作られているため、その根拠にはなりにくいが、あえてその根拠を求めれば、学校教育法第84条での通信での教育、そして、大学設置基準第25条においての多様なメディアを高度に利用した教育方法の是認がある。さらに、情報通信技術の発展を踏まえた文部科学省の通達（2001年文部科学省告示第51号）では、遠隔教育の定義を変更するとともに、従来の「双方向」の条件を緩和して、「同様な効果を持つ方法」も認めている。これらを背景にして、学生の IT 環境や彼らの技量等を十分に把握するという条件を付けて、遠隔教育の実施を認める通知が出されたのである。この措置が COVID-19 への対応のみとすれば、そのワクチンが作られて感染症が克服されると予想される2～3年後には、大学教育は昨年までの状況に戻ることになる。

しかし、急速に進化する社会状況と大学への期待を考えると、その可能性は低いと言わざるを得ない。教育の方法についてのみの改革に関しては、デジタ

ル技術の有用性が社会で認められ始めた20数年前の状況とよく似ている。デジタル技術を使って授業の改革を進めようという機運が全国的に広がり、多くの研究者がその研究に従事した。筆者（橋本）もその一人であった。確かにデジタル技術を用いた効果的な方法が提案され、実践も行われた[2)]。しかし、教材作成に多くの時間がかかることや、教材の提示にあたっては補助員の手を借りざるを得ないこと、さらには、機器の関係から特定の教室での実施を余儀なくされること等の壁を超えることができず、その成果は十分に根付くことができなかった。ただ、その動きの結果として、大学の中に現在の情報センターや教育実践センター等の前身ともなった教育実践に関するセンターを開設した大学も少なくなかった。

現在の状況は、その時代と大きく異なっている。近年の IT 技術は当時の域をはるかに超え、インフラの整備も進み、利用できる機器も小さく持ち運べるものになった。さらに、学生たちも IT に幼い頃から馴染み、IT を使った授業への期待感も持っている。加えて、実践的な能力を備えた卒業生を期待する社会は、大学での講義等での学びよりはインターンシップ等の社会での学びを多く経験することを大学に要求している。これは、実務家教員の配置要求やセメスター制からクオーター制への移行要求となって現れている。これらの社会的要求に応えるためには、現在の教育を基本から変える必要が生じてきているのも事実である。社会からの要求実現や将来社会での大学での教育等を総合的に勘案すれば、対面式中心の大学教育を大きく改革する時期にきていると判断せざるを得ない。今回のコロナ禍の状況は想定外ではあるが、未来の大学教育の在り方を考える契機となっている。

2．授業の実施と調査方法

調査の対象としたのは１年生の全員が受講するホスピタリティ概論である。この講義については、開設時から受講状況や学生の変容について研究し、報告を行ってきた[3~5)]。今回は、昨年度までと異なり、遠隔での実施となったために、授業内容や方法を大きく変えざるを得ず、それに従ってシラバスも変更した[(資料1)]。具体的には、従来の授業では、学生が大学を知る、或いは、彼、彼女らが多様な同級生の存在を短時間で認識し、授業に積極的に参加できるように、学科を超えたグループを編成し、その場での討議やグループごとの提案活動を多用してきた。しかし、オンラインの授業ではこの方法を踏襲することは非常に難しい。また、オンライン授業であったとしてもアクティブラーニングは必須の命題でもある。そこで、担当教員で検討を加えた結果、次のような形で授業を行うことで合意した。

① 学科を超えたグループ編成は行わず、各学科の授業担当教員が、その学科の学生を担当する（各教員当たり30～40人の受講生）。
② LMS の manaba を用いて、授業内容を予告して授業への参加を促すとともに授業後に課題を課すことによって授業内容の定着を図る。
③ 担当教員は、manaba を通して提出された課題を評価するとともに、提出された課題に対してコメントを添え、受講生の意欲喚起を促す。
④ 質問コーナーを設け、受信不能などの緊急事態に備える。このため、担当教員は、予め組まれた授業時間には研究室で待機する。
⑤ 受信状況等を考え、オンデマンド型（録画配信）のオンライン授業とし、閲覧期間を設ける。

調査に関しても、従来は紙媒体での調査であったが、manaba を活用したオンラインの調査方法に切り替えた。昨年度まではホスピタリティ概論の中で３回（開始時、全学科生が共通な内容を受講する期間を終える中間時、授業終了時）の調査を行ってきたが、今回は、遠隔教育に関する２回（開始時、１か月後）の調査を加え、調査は５回となった。これらのうち、従来からの開始時の調査結果、及び、中間時の調査結果については、別稿に譲り（本紀要の教育基盤センター初年次教育部門報告参照）、本報告では、従来の調査に関しては概要にとどめ、遠隔教育に関する２回の調査を中心に述べる。

１）従来からの調査とその方法

開始時の調査と中間時の調査の内容については、前掲の報告[3~5)] と大きくは変更していないが、クリッカーや紙媒体の使用から manaba を

活用しての調査に変更した。また、遠隔教育実施に添って授業内容に変更を加えたため、若干の調査項目の変更が生じた。

2）遠隔教育に関する調査

この調査は、受講環境や受講状況、そして、オンライン授業に対する意見や要望などを調査項目にして、授業開始時と1か月後に実施された。調査時期に間隔をあけたのは、その間の変化を踏まえた回答を期待したからである。それぞれの調査用紙については、巻末に掲げている（資料2～3）。

3．調 査 結 果

1）従来から継続している調査

○第1回目の授業で行う調査

この調査は、新入生の出身地、オープンキャンパスへの参加、本学進学の決定時期、及び、本学進学の順位などを聞き、学科別に分析してその後の授業展開を考える資料にするためのものであるが、各項目ともに従前の結果と大きな変化は見られなかった。これは、コロナの影響が出る前に多くの新入生が進学先を決めていたことを示している。その結果、例年同様の傾向を示す高校生が入学してきたことが明らかになった。

○中間時（第11回目の授業）での調査

遠隔教育になった今年度は、全学科生が共通で受ける授業が終了するのが11回目となり、その時間にそれまでの授業に関する受講生の受け止め方や意見などを聞くことになった。今回はオンライン授業であったことやオンラインで可能な内容に変更したこともあり、従来の結果と単純に比較はできないが、授業内容の受け止めに関しては、例年同様に肯定的な回答が多くみられた。つまり、遠隔であっても本授業の目標は達成されたと判断することができるが、詳細な分析が必要となる。ただ、自由記述の部分に関しては、遠隔授業への言及もあり、例年同様とはいかなかった。

2）遠隔授業に関する調査

この調査は、本来ならば学期が始まる前、少なくとも遠隔授業での実施を決める前に行うべきものであるが、その時間的余裕がなかったため、第1回目の授業時（4月29日）に実施した。そして、オンライン授業の進行に添ったIT環境の変化や受講生の受け止め方の変化を明らかにするために、授業開始から1か月後の4回目の授業時（5月27日）にも実施した。調査対象者の内訳は次の通りである。

全受講者数：489人
回答者数　：452人（第1回目調査）
　　451人（第2回目調査）
回収率　　：92.3%

各調査項目に関する1回目授業時と4回目授業時の回答結果は次の通りである。なお、2回の調査に参加した者のデータのみを対象とした。

また、各調査項目においては欠損値を除外しているためデータ総数が異なる。①使用機器および⑱は複数回答を可とした。（各表の数字は人数である。）

① 使用しているIT機器

表1　使用機器

	1	2	3	4	5	6	7
1回目	351	64	274	34	26	8	0
2回目	272	54	313	28	12	9	0

注：1：スマートフォン、2：タブレット、3：ノートパソコン（カメラ有り）、4：ノートパソコン（カメラ無し）、5：デスクトップパソコン（カメラ有り）、6：デスクトップパソコン（カメラ無し）、7：使用する機器はない

② 授業に参加する場の通信環境

表2　通信環境

	1	2	3	4	5
1回目	28	45	21	326	0
2回目	37	105	16	263	0

注：1：スマートフォンを使用（通信制限なし）、2：スマートフォンを使用（通信制限有り）、3：有線LANを使用、4：無線LAN（Wifi）を使用、5：通信機器はない

③　使用している IT の周辺機器

表 3　周辺機器

	1	2	3	4
1 回目	28	45	21	326
2 回目	37	105	16	263

注：1：パソコン用マイクがある、2：パソコン用カメラがある、3：プリンターがある、4：周辺機器はない

④　授業を受講している場所

表 4　受講場所

	1	2	3
1 回目	413	3	6
2 回目	410	4	9

注：1：自宅、2：友達の家、3：Wifi のある場所或いは店舗等

⑤　アクセスの円滑度「授業に円滑にアクセスできている」

表 5　アクセスの円滑度

	1	2	3	4	5
1 回目	1	19	58	218	124
2 回目	13	37	48	182	143

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑥　受講の問題度「問題なく受講できている」

表 6　受講の問題度

	1	2	3	4	5
1 回目	1	22	64	210	125
2 回目	6	35	49	178	154

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑦　画面の明瞭度「画面は明瞭である」

表 7　画面の明瞭度

	1	2	3	4	5
1 回目	2	12	49	207	151
2 回目	4	23	61	195	135

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑧　音声の明瞭度「音声は明瞭である」

表 8　音声の明瞭度

	1	2	3	4	5
1 回目	0	31	89	189	111
2 回目	1	39	81	221	80

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑨　提示資料の明瞭度「提示された資料は明瞭である」

表 9　提示資料の明瞭度

	1	2	3	4	5
1 回目	1	15	38	227	140
2 回目	3	20	63	198	136

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑩　授業の進行度「授業の進行は適切である」

表10　授業の進行度

	1	2	3	4	5
1 回目	0	8	48	203	163
2 回目	4	16	62	205	132

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑪　授業の理解度「授業はよく理解できている」

表11　授業の理解度

	1	2	3	4	5
1 回目	0	20	62	246	93
2 回目	2	34	88	242	54

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑫　遠隔授業の受け取り度「授業は楽しい」

表12　遠隔授業の受け取り度

	1	2	3	4	5
1 回目	16	57	129	168	52
2 回目	30	62	124	135	71

注：1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらとも言えない、4：ややそう思う、5：非常にそう思う

⑬　受講にあたっての不安等（複数回答可）

表13　受講にあたっての不安等

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
1回目	0	34	106	120	99	202	211	127	121	87	80
2回目	0	40	64	106	76	225	169	101	53	134	120

注：1：パソコンスキルに対する不安、2：通信料金への不安、3：アクセスへの不安、4：能力獲得への不安、5：授業継続への不安、6：試験への備えに対する不安、7：友達ができないことへの不安、8：先生とのコミュニケーション不足への不安、9：外出できない不安、10：自由に時間が使える快適さ、11：大学へ行かないですむ快適さ

このように、受講生が使用する機器は、スマートフォン、タブレット、そして、パソコン（含むノート型、デスクトップ型）に分かれている。さらに、通信環境は無線ランを使用している場合が多いが、約10～25％の受講生は通信制限のある環境での受講となっている。そして、自宅での受講が殆どを占めている。一方、スムーズなアクセスや受講、画面や音声及び資料の明瞭さ等については、「非常にそう思う」や「ややそう思う」との積極的な肯定は、約70～80％に達するものの、残りの受講生は「どちらともいえない」や否定的な回答となっている。そして、授業の理解度の肯定的な回答も、70～80％である。つまり、70～80％の受講生は満足しているが、20～30％の受講生は何らかの不満等を持っての受講となっている。

3）スマートフォンによる受講者とパソコン（タブレットを含む）による受講者の回答状況

遠隔教育の実施にあたっては、受信機器の整備が一つの前提条件となる。そこで、1回目の調査と2回目の調査での受信機器の違いによる各項目についての回答状況を分析した。授業での資料の提示等を考え、スマートフォンとパソコン（含むタブレット）の使用者に分けて分析を行った。回答の分析にあたっては、各問いかけに対しての回答を、次の様に点数化した。

非常にそう思う：5、ややそう思う：4、どちらとも言えない：3、あまりそう思わない：2、全くそう思わない：1

①　受信機器の変化

表14に示すように、1回目と2回目の調査においてスマートフォンのみを利用していた受講生は40人で、2回目はスマートフォンからタブレットやパソコンに変更した受講生は31人であり、1回目と2回目の調査ともにパソコンやタブレットを利用していた受講生は338人であった。

表14　1回目と2回目の受信機器

		2回目	
		スマホ	スマホ以外
1回目	スマホ	40	31
	スマホ以外	14	338

以下、1回目と2回目の調査で受信機器がスマートフォンであった受講生40人と1回目と2回目の調査ともにパソコンやタブレットを利用していた受講生338人の各項目の結果について、2要因の分散分析を行った。なお、各調査項目においては欠損値があった者のデータは除外しているため総数が異なる。

②「スムーズにアクセスできている」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低く（$F(1,373)=17.4, p=0.000$）、1回目よりも2回目の平均評定値が低いことが明らかになった（$F(1,373)=7.2, p=.008$）。また、1回目、2回目共に、スマートフォンのみの方がスマートフォン以外に比べて平均評定値が低く、スマートフォンのみでは2回目の評定値が1回目に比べて低いことが明らかになった（$p<.05$）。

表15　スムーズなアクセス

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝39）	3.8	(0.9)	3.3	(1.1)
スマホ以外（*N*＝336）	4.1	(0.8)	4.1	(1.0)

注：スマホ＝スマートフォンのみの略（以下同様）

③「問題なく受講できている」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低いことが明らかになった（$F(1,374)=16.8$, $p=0.000$）。

表16　問題のない受講

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	3.7	(1.0)	3.5	(1.0)
スマホ以外（*N*＝336）	4.1	(0.8)	4.1	(0.9)

④「画面は明瞭である」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低く（$F(1,370)=17.4$, $p=0.000$）、1回目よりも2回目の平均評定値が低いことが明らかになった（$F(1,370)=13.2$, $p=.000$）。また、1回目、2回目共に、スマートフォンのみの方がスマートフォン以外に比べて平均評定値が低く、スマートフォンのみでは2回目の評定値が1回目に比べて低いことが明らかになった（$p<.05$）。

表17　画面の明瞭性

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	3.9	(0.9)	3.5	(0.9)
スマホ以外（*N*＝332）	4.2	(0.8)	4.1	(0.9)

⑤「音声はよく聞き取れる」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低く（$F(1,373)=13.6$, $p=0.000$）、1回目よりも2回目の平均評定値が低いことが明らかになった（$F(1,373)=7.6$, $p=.006$）。

表18　音声の明瞭性

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝39）	3.6	(0.9)	3.3	(0.8)
スマホ以外（*N*＝336）	3.9	(0.9)	3.9	(0.8)

⑥「提示された資料はよく分かる」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低いことが明らかになった（$F(1,372)=26.2$, $p=0.000$）。

表19　資料の明瞭性

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	3.6	(0.9)	3.7	(1.0)
スマホ以外（*N*＝334）	4.2	(0.7)	4.1	(0.8)

⑦「授業の進行は適切である」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低く（$F(1,372)=8.1$, $p=0.005$）、1回目よりも2回目の平均評定値が低いことが明らかになった（$F(1,372)=9.4$, $p=.002$）。

表20　授業の進行の適切性

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	4.1	(0.8)	3.7	(0.9)
スマホ以外（*N*＝334）	4.3	(0.7)	4.1	(0.8)

⑧「授業はよく理解できている」

検定の結果、スマートフォンのみの受講者の回答の平均評点がパソコンの受講者よりも有意に低く（$F(1,372)=15.9$, $p=0.000$）、1回目よりも2回目の平均評定値が低いことが明らかになった（$F(1,372)=8.4$, $p=.004$）。

表21　授業の理解度

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	3.6	(0.9)	3.4	(1.0)
スマホ以外（*N*＝334）	4.0	(0.7)	3.8	(0.8)

⑨「遠隔授業は楽しい」

検定の結果、受信機器や回数による有意な違いは見られなかった（$p>.05$）。

表22　授業の楽しさ

	1回目		2回目	
	平均値	(*SD*)	平均値	(*SD*)
スマホ（*N*＝40）	3.3	(1.1)	3.1	(1.3)
スマホ以外（*N*＝336）	3.5	(1.0)	3.4	(1.1)

このように、授業の成果にかかわると思われる9つの項目のうち8つの項目において、スマートフォンの受講者の平均評点が、パソコンの受講者の平均評点よりも有意に低いことが明らかになった。

4．考　　察

1）遠隔教育のあり方

新型コロナウイルスの感染防止という合言葉の下で実施された遠隔教育の実施は、やむを得ないこととは言え、多くの教員に大きなショックを与えた。それは、殆どの大学では対面式授業を採用しており、教員にとって遠隔教育の経験は皆無に等しいからである。このために、遠隔教育実施に向けた調査を行い、その結果をもとに遠隔教育実施のガイドライン等を作成した大学、情報に関するセンター等が遠隔教育の実施方法やその注意点等を発信した大学、さらに、遠隔教育についてのFDを開催した大学など、様々な対応策がみられた。本大学においては、FDによって遠隔教育の実施方法の周知徹底を図った。また、教育基盤センターによって遠隔教育実施に向けた留意点等を記載した冊子が作成された[6]。ただ、各大学の対応には短期決戦的な側面が拭えず、長期的な展望を示すことには至らなかった。

このような状況の下で「ホスピタリティ概論」は、LMSのmanabaを活用したオンデマンド型で実践された。結果の項でふれたように、従来から行ってきた調査については、その回答に大きな変化は見られなかった。この点では、昨年と同様な授業の効果があったと考えることもできるが、実施方法が異なり、調査方法が異なる二つの調査を、単純に比べることは控えたい。

遠隔教育についての調査においては、パソコン、タブレット、そして、スマートフォンという3種の機器で受講がなされているものの、スマートフォンでの受講は少数である。受講場所は自宅が殆どを占め、このために受信環境が十分でない学生もいることが明らかになった。「授業へのアクセスが円滑である」や「画面が明瞭である」や「音声がよく聞き取れる」などの質問項目に関しては、約80％の受講生が、「非常にそう思う」や「そう思う」と答えている。しかし、残りの受講生は、「どちらとも言えない」、「そう思わない」や「全くそう思わない」と答えている。この差は、受信機器の違いによるものではないかと考え、スマートフォンのみでの受講生とスマートフォン以外の受講生（デスクトップ及びラップトップ型パソコン及びタブレット使用の受講生）との比較を行った。

その結果、スムーズなアクセス、問題ない受講、画面の明瞭性、音声の明瞭性等の項目に加えて、授業の理解度を問う項目において、スマートフォンでの受講者の平均評点がスマートフォン以外の受講者回答よりも低い値になっている。これは受講環境によって受講状況に差が出ていることを示すものである。これは、遠隔教育実施の前提条件として一般に言われている「受信環境を同一水準にする」が整っていないことになる。これは家庭の経済格差の結果とも考えられる。幼少時代から教育格差は始まっているとの指摘があるが、その格差が大学で縮小されることはあっても、維持、拡大することは絶対に避けなければならない[7~8]。この状況を放置したままで、仮に期末試験等が行われるとすれば、スマートフォンでの受講者はハンディを背負うことになる。この状況は早急に改善されなければならない。

さらに、遠隔授業を実施し、その在り方を検討する中で、早急に解決すべき次の①～③の課題が明らかになった。

① 教員の負担に関すること

遠隔教育になれば、教員にとって負担が少なくなるとの意見も聞かれるが、全くそのようなことはない。それは、対面式とは異なり、受講者は常に孤独な環境に置かれる。従って、受講者の意欲を高めるためには、教員が常に励ましや賞賛の、また、時には厳しい言葉をかけていかなければならない。このきっかけとしてレポートを課し、その回答に対するコメントを考えることになる。この作業が予想以上に大きな負担となる。それは、受講生はレポートを提出した時から、教員からのコメントを気にするものである。このためには、レポートへの早い反応が必要となる。これによって対面授業のような円滑な人間関係をいち早く作らなければならない。一方、受講生のレポートの提出時間は予想できないため、課題の受付時間から、教員はモニターから離れられなくなる。これは、心理的にも大きなプレッシャーとなる。また、レポートの状況を踏まえての授業の準備や教材の準備を行うとなると、時間的にも追われるだけでなく教材作成等の負担が大きくなる。この状況は、大学教育学会が行った調査でも示され、半数の教員は研究時間が減少したと答えている[9)]。

教員の授業担当時間に関しては一定の基準はないが、経験上、週 6 コマが一つの基準になっているような気がする。この他に、特殊事情での授業の負担や委員会等の校務の負担もある。そして、近年は研究における外部資金の獲得も強調されている。この状況下で、遠隔教育で増える業務を円滑に果していくことは非常に難しい。遠隔教育の充実を図るためには、教員の負担軽減の視点が重要となる。

② 受講環境の整備に関すること

受講生の視点に立てば、入学した以上、大学の授業に関しては同じような環境で受講したいとの願いは当然のことである。これは対面教育の際にも考慮されるが、特に、遠隔教育の場合は、前提条件となる。本年度はコロナ感染予防という緊急事態もあって、この条件を充たすことはできなかった。その結果が、如何に深刻かということは、上述した調査で示されたものと思う。この環境の差は、家庭の経済の差とも考えられる。このような経済格差を教育の中に持ち込まないというのが、学校教育の基本である。感染拡大という緊急時であったとしても、受講環境の整備が難しい学生のために、受講環境を整備した教室等を用意したり、IT 機器の貸し出しなどが大学に求められる。

③ 新入生への配慮に関すること

新入生は高等学校までの家庭環境や学習環境を離れ、大学での学びに期待して進学してきたのである。前報でも述べたように、対面授業時であっても所属学科によって差はあるが、10%～50%の学生が心的及び身体的な不安を感じつつ学修に取り組んでいる。入学当初からの遠隔教育では、この改善に注力しなければならない。このためには、新入生に対して、早期から個の把握と教員との相互理解に費やす時間を多くしなければならない。それを念頭に、本授業においては課題の提出が少ない学生たちに、励ましや近況伺いのメールを送った。しかし、その状況に回復の兆候が見られない学生も少なくなかった。この状況に陥る前に、新入生に対して対面でのコミュニケーションの場を設定する必要がある。その場を通して、「大学は君たちを、決して忘れてはいない」とのメッセージを送り続けることはもちろんであるが、大学外からも悩みを打ち明けられる IT を利用した相談体制を作る必要がある。感染拡大時であったとしても、何らかの工夫を行い、学生たちの想いが届き、大学からのメッセージが出せる場を設定する必要性を忘れてはならない。

2）将来の大学教育

ここ数年、文部科学省は大学の種別化を行うとともに、各大学に教育の質向上を強く求めてきた。この背景には、社会のグローバル化及び IT 化が急速に進むという認識と、少子化の中で高等教育を充実しなければ、先進国としての地位が保てないという危機感がある。それは、小学校教育段階からの英語教育の充実や、プログラミング教育の組み入れと

なって現れ、さらに、高等学校の無償化に続く大学の無償化とつながっている。この流れは、将来に向けた大学教育のより一層の改革を迫るものでもある。

将来、大学におけるITを活用した授業数の拡大が加速されると考えられる。その背景には、ITが様々な機能を持ち始めたことにもよるが、社会が高度な能力を持った即戦力を要求するようになり、世界的研究拠点大学を除く大学に対して、獲得した知識を確実に使いこなせる人材の育成を求めていることがある。この要請に応じるためには、大学は様々な実習機会の提供と長い体験学修期間の設定を行わなければならない。これは、大学に従来のカリキュラムの基本的な変更を求めることになる。

高名な師のもとに、学びたい人たちが集まることによって、大学は創設された。その後、社会の要求に従って、大学は学びを提供する分野を広げてきたが、人材育成は大学で行うとの信念は貫かれてきた。しかし、この伝統的な大学での教育観に揺らぎが生じている。

つまり、大学外での学びをどのように保証するかということが問われているのである。これは、カリキュラムの基本的な考え方や、教員の果たすべき役割などという基本的な命題の検討を大学に求めている。そして、その対応の向こうに、将来社会における大学の在り方が示されることになる。

この難しい議論を支えるのは、大学に積み重ねられてきた教学IRのデータであり、ステークホルダーを加えた外部評価の意見である。この結果によっては、現在のように大学が個で存在するというよりも、いくつかの大学が連携し、共通する授業科目をITを活用して分担する一方で、それぞれの大学は、理念に沿った人間形成に力を注ぐということが現実となるかもしれない。

18歳人口の減少が顕著で長期にわたることを踏まえれば、特に、地方の小・中規模大学では、大学の在り方に関する議論を深め、それぞれの大学の将来像を明確に示し、他との差別化を図ることが必要である。そして、全ての教職員がその戦略を共有して、目標達成に向けた歩みを進めることが不可欠となる。

現在、大学の設置基準の見直しが始まっている。これは大学の再編成も視野に入っている。他大学との連携や合併を恐れることなく、時代を先取りする戦略を立て、実行できる大学のみが生き残れる時代が来ている。

5．おわりに

2020年は新型コロナ感染症に明け暮れた年であった。大学はその影響をもろに受け、手探り状態での遠隔教育が実施された。しかし、その経験から、遠隔教育の在り方や将来に向けた大学教育の将来を考えることができたのは、不幸中の幸いであった。社会における経済格差が進む中で、経済格差を教育格差にしないという決意の実現は、大学人の必須の課題でもある。ITを活用した教育は、大学の新しい力とはなる半面、一人ひとりの教員が行ってきた教育をこれからも同じ形態で続けるのか、社会を巻き込んでの人間形成をいかに実現するのかなど、大学の根本的な問題が浮上している。

つまり、大学はこれまで培ってきた人間を作る力を、将来社会に合わせながらどのように変えていくかが問われているのである。これは、将来社会における大学のあり方及び教員のあり方と連動する。今後もこれらの課題に関する検討を重ねていく必要がある。

本研究は、人間社会学部の研究倫理委員会の承認を得て行った（受付番号F-２）。

参考・引用文献

１）文部科学省（2020年４月）:「大学における遠隔授業の実施にあたっての学生の通信環境への配慮等について」
２）山地弘起・佐賀啓男（2003）：高等教育とIT，玉川大学出版部
３）藤原俊幸他（2017）：教職協働で行う初年次教育―ホスピタリティ概論の実践と課題―，『長崎国際大学教育基盤センター紀要』vol.1，pp.55-80，長崎国際大学教育基盤センター
４）井上英也他（2018）：初年次教育の深化に向けて―ホスピタリティ概論の分析から―，『長崎国際大学教育基盤センター紀要』，vol.2，pp.27-54，長崎国際大学教育基盤センター
５）藤原俊幸他（2019）：建学の精神の徹底を図る初年次教育の実践と課題―ホスピタリティ概論の分析から―，『長崎国際大学教育基盤センター紀要』vol.3，pp.1-24，長崎国際大学教育基盤センター

6）長崎国際大学教育基盤センター（2020）：遠隔教育の実施に向けて，pp.1-11，長崎国際大学教育基盤センター
7）松岡亮二（2019）：教育格差―階層・地域・学歴―，pp.1-360，筑摩書房
8）小林庸平他（2020）：新型コロナウイルス感染症によって拡大する教育格差，pp.1-54，三菱 UFJ リサーチ＆コンサルティング
9）大学教育学会（2020）：大学教育における COVID-19 への対応実態についての調査，理事会資料

藤原俊幸，陳慶光，矢野俊幸，ほか17名

（資料１）

2020年度のシラバス

授業科目（ナンバリング）	ホスピタリティ概論（AA103）			担当教員	安部直樹・安東由喜雄・木村勝彦 橋本建夫・高橋憲司・陳慶光・東出　朋 ヴィラーグ ヴィクトル・中村尚生 小田和人・藤井俊輔・藤原俊幸 藤木　司・田中啓太郎		
展開方法	講義	単位数	２単位	開講年次・時期	１年・前期	必修・選択	必修

授　業　の　ね　ら　い	アクティブラーニングの類型
本学は、「人間尊重」を基本理念に、「ホスピタリティの探求、実現」を教育・研究の基礎とし、ホスピタリティを構成する能力を身につけ活用できることが、学位授与の方針となっている。本講座は、本学でのあらゆる学びの基本となるホスピタリティの意味を理解し、実践的に体現していくことができるようになることをねらいとする。本年度は新型コロナウイルス感染防止のためにオンライン授業で行う。	②⑥⑩⑫

ホスピタリティを構成する能力	学生の授業における到達目標	評価手段・方法	評価比率
専門力	ホスピタリティの具体的なあり方を自らの専攻分野に関連づけて説明することができる。	manaba アンケート	25%
情報収集、分析力	ホスピタリティの基本的な精神とそのさまざまな表現について情報を収集し、分析することができる。	manaba アンケート	15%
コミュニケーション力	ホスピタリティの精神を社会生活の中で実践し円滑な人間関係を築くために、担当教員と積極的なコミュニケーションを図ることができる。	manaba アンケート及び質問等	15%
協働・課題解決力	与えられた課題を自らのものとして捉え、解決を試みることができる。	manaba アンケート	15%
多様性理解力	留学生等の意見を聞き、自己の育ちとの違いを認識するとともに、多くの価値観を認め、協力できる。	manaba アンケート	30%
出　　席		manaba アンケートの提出での確認	
合　　計		100%	

評価基準及び評価手段・方法の補足説明

授業中の参加態度、発表など、授業での積極性、協調性、主体性、などを manaba アンケートの項目への回答で評価する。この manaba アンケートには授業の概要を聞く項目もあり、それによって、理解度も確認する。各受講生から提出されたアンケートには、各担当教員がコメントをつけ、授業への参加を常に促す。最終回のアンケートには、授業を振り返り、自己の将来と絡めての課題もあり、それらを総合的に評価する。アンケートでの質問には毎回真摯に応え、コメントも行う。

授　業　の　概　要

本授業は、テーマ、内容に応じて、理事長、学長、副学長をはじめとする本学教員および社会で活躍する本学の卒業生ならびに外部講師の講義により、本学の学びの核となる“ホスピタリティ”の多面的な理解を目指す。ただ、本年度は、オンライン授業となるため、上述の講話については、録画をして時間割で指定された時間に放映するとともに、you tube でのオンデマンド形式にも対応する。受講者は録画を視聴し、manaba で配信されるアンケートの項目に答え、それを返信することによって授業への参加を証明していく。このアンケートに対して、12名の担当教員が分担をして目を通し、適切なコメントをつけて、受講者の受講への意欲を喚起する。また、本来は、学科混成のクラスを編成するが、オンライン授業を前提に学科別にクラスを編成する。この授業の標準的な１コマあたりの授業外学修時間は、180分とする。

教　科　書　・　参　考　書

教科書：特に指定しない　　参考書：適宜指示する
指定図書：「本物の大人論」外山滋比古（著）海竜社

授業外における学修及び学生に期待すること

・留学生や教職員の話を聞き、自分と異なることへの受容性を高め、幅広い視野を養うこと。
・先輩の職場での話を聞くことによって、自分自身のホスピタリティに基づく行動が全体に与えるプラスの影響について考える習慣を身につけること。
・授業で学んだことを直ちに実践してみること。

回	テ　ー　マ	授　業　の　内　容	予習・復習
1	オリエンテーション	オンライン授業の説明、担当教員の紹介、manaba での授業の指示、やアンケートの回答方法について説明を行うとともに、評価方法等の説明も行う。	シラバスを読んでおく
2	長崎国際大学が育成する学士像（学長）	大学の役割を説明するとともに、学生一人一人が将来像を描けるように、長崎国際大学が育てる人物像をディプロマ・ポリシーやカリキュラム・ポリシーを活用して具体的に述べる。さらに、安心して学修に励むことができるような体制を、教員や職員が一体となって構築していることを紹介し、主体的な学修への一歩を促す。	（予）ディプロマ・ポリシーを見ておく （復）アンケートを提出
3	プレゼンテーションの重要性（外部講師）	限られた時間の中で、情報や主張を自分の言葉で聴衆に伝えることを目的とするプレゼンテーションの重要性について専門家から学ぶ。	（予）プレゼンテーションの意味を調べておく （復）アンケートを提出
4	ホスピタリティの起源と文化（木村副学長）	世界史および日本史におけるホスピタリティの起源と変遷を理解し、現代社会の課題を明らかにする。	（予）ホスピタリティの意味を調べておく （復）アンケートを提出
5	国際化とホスピタリティ	国際交流・留学生支援室の劉さんが、留学生の実状と留学先での葛藤などを紹介するとともに、異文化の理解の重要性を説く。	（予）国際交流について考える。 （復）アンケートを提出する。
6	１年生への期待	安部理事長が、九州文化学園創立の経緯やその発展の歴史を紹介する。次いで、地域の大学として開設された本学の理念である「人間尊重」や「ホスピタリティ」を茶道を例にして具体的に述べ、自校愛の芽生えを図る。	（予）九州文化学園のホームページを見ておく （復）アンケートを提出する
7	教職員のキャリアとホスピタリティ⑴	教職員のＡ班（８名）が自身のキャリアを紹介するとともに、職場でのホスピタリティの重要性を説く。	（予）自己のキャリアを考える （復）アンケートの提出
8	教職員のキャリアとホスピタリティ⑵	教職員のＢ班（８名）が自身のキャリアを紹介するとともに、職場でのホスピタリティの重要性を説く。	（予）自己のキャリアを考える （復）アンケートの提出
9	本学の主要なセンターの紹介	キャンパスライフに欠かせない CH サポートセンターとキャリアセンターの役割や学生の活用状況について紹介する。	（予）学内のセンターを予習する （復）アンケートの提出
10	大学における図書館の意義と役割	図書館の業務の紹介をするとともに図書館長が読書の重要性について講話する。	（予）図書館の意味を調べておく （復）アンケートの提出
11	ホスピタリティ・ルーブリックの理解と自己認識	ホスピタリティ・ルーブリックに基づき、「ホスピタリティを構成する５つの能力」について理解し、自己の現状認識をした上で行動目標を設定する。	（予）ポートフォリオにあるホスピタリティ・ルーブリックを調べておく （復）アンケートの提出
12		学科別の課題とホスピタリティ①	
13		学科別の課題とホスピタリティ②	
14		学科別の課題とホスピタリティ③	
15		学科別のまとめ及びレポート提出	

（資料２）
第１回目の遠隔教育に関する調査用紙

遠隔教育の受講に関する調査

遠隔教育が始まって 1 週間がたちました。困っていることはありませんか。現在の学生さんたちの受講状況を知りたいと思います。ありのままをお答えください。（最も適切と思う項目をチェックして、答えてください。）

1. 回答は個人が特定できないように統計的に処理され、学内で共有することによって今後の遠隔教育の改善に生かしたいと思います。協力して頂けますか。
   ①　協力する　　②　判断できない　　③　協力しない
2. どの学科に所属されていますか。
   ①　国際観光学科　　②　社会福祉学科　　③　健康栄養学科　　④　薬学科
3. 受講にあたって、主に使用している機器を教えて下さい。
   ①　スマートフォン　　②　タブレット　　③　ノートパソコン（カメラ有り）
   ④　ノートパソコン（カメラ無し）　　⑤　デスクトップパソコン（カメラ有り）
   ⑥　デスクトップパソコン（カメラ無し）　⑦　使用する機器はない
4. 通信環境を教えて下さい。
   ①スマートフォンを使用（通信制限なし）　②スマートフォンを使用（通信制限有り）
   ③有線 LAN を使用　④無線 LAN（Wifi）を使用　⑤通信機器はない
5. 周辺機器について教えて下さい。（使用できる機器全てを答えてください）
   ①　パソコン用マイクがある　　②　パソコン用カメラがある
   ③　プリンターがある　　④　周辺機器はない
6. 遠隔授業を、どこで受講していますか。
   ①　自宅　　②　友達の家　　③　Wifi のある場所或いは店舗等
7. これまでの受講状況について教えて下さい。
   A スムーズにアクセスできている。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   B 問題なく受講できている。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   C 画面は明瞭である。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   D 音声はよく聞き取れる。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない

E 提示された資料はよく分かる。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

F 授業の進行は、適切である。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

G 授業はよく理解できている。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

H 遠隔授業は楽しい。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

8. 受講する中で感じていることを教えて下さい。(全てを選んでください)
①　パソコンスキルに対する不安　②　通信料金への不安
③　アクセスへの不安　④　能力獲得への不安　⑤　授業継続への不安
⑥　試験への備えに対する不安　⑦　友達ができないことへの不安
⑧　先生とのコミュニケーション不足への不安　⑨　外出できない不安
⑩　自由に時間が使える快適さ　⑪　大学へ行かないですむ快適さ
⑫　その他（　　）

9. その他、大学の対応等への意見や感想を書いて下さい。
（　　）

ご協力、有難うございました。

2020 年 4 月 29 日

長崎国際大学教育基盤センター
センター長　橋　本　健　夫

（資料３）
第２回目の遠隔授業に関する調査用紙

遠隔教育の受講に関する調査（2）

遠隔教育が始まって約 1 か月がたちました。受講予定の全ての授業を受けられたことと思います。現在のあなた方の受講状況や遠隔授業への想い等を知り、今後に生かしたいと思います。現在の受講状況や授業についての感想などを教えて下さい。（各質問では、最も適切と思う項目をチェックして、答えてください。）

1. 回答は個人が特定できないように統計的に処理され、学内で共有するとともに学会等で報告し、今後の遠隔教育の改善に生かしたいと思います。協力して頂けますか。
   ①　協力する　　②　判断できない　　③　協力しない
2. どの学科に所属されていますか。
   ①　国際観光学科　　②　社会福祉学科　　③　健康栄養学科　　④　薬学科
3. 受講にあたって、主に使用している機器を教えて下さい。
   ①　スマートフォン　　②　タブレット　　③　ノートパソコン（カメラ有り）
   ④　ノートパソコン（カメラ無し）　　⑤　デスクトップパソコン（カメラ有り）
   ⑥　デスクトップパソコン（カメラ無し）　⑦　使用する機器はない
4. 通信環境を教えて下さい。
   ①スマートフォンを使用（通信制限なし）　②スマートフォンを使用（通信制限有り）
   ③有線 LAN を使用　④無線 LAN（Wifi）を使用　⑤通信機器はない
5. 周辺機器について教えて下さい。（使用できる機器全てを答えてください）
   ①　パソコン用マイクがある　　②　パソコン用カメラがある
   ③　プリンターがある　　④　周辺機器はない
6. 遠隔授業を、どこで受講していますか。
   ①　自宅　　②　友達の家　　③　Wifi のある場所或いは店舗等
7. これまでの受講状況について教えて下さい。
   A スムーズにアクセスできている。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   B 問題なく受講できている。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   C 画面は明瞭である。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない
   D 音声はよく聞き取れる。
   ⑤　非常にそう思う　　④　ややそう思う　　③　どちらとも言えない
   ②　あまりそう思わない　　①　全くそう思わない

E 提示された資料はよく分かる。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

F 授業の進行は、適切である。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

G 授業はよく理解できている。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

H 遠隔授業は楽しい。
⑤　非常にそう思う　④　ややそう思う　③　どちらとも言えない
②　あまりそう思わない　①　全くそう思わない

8. 受講する中で感じていることを教えて下さい。(全てを選んでください)
①　パソコンスキルに対する不安　②　通信料金への不安
③　アクセスへの不安　④　能力獲得への不安　⑤　授業継続への不安
⑥　試験への備えに対する不安　⑦　友達ができないことへの不安
⑧　先生とのコミュニケーション不足への不安　⑨　外出できない不安
⑩　自由に時間が使える快適さ　⑪　大学へ行かないですむ快適さ
⑫　その他（　　）

9. その他、遠隔授業や大学に対する意見や感想を書いて下さい。
（　　）

ご協力、有難うございました。

2020 年 5 月 27 日

長崎国際大学教育基盤センター
センター長　橋　本　健　夫